序

青い円柱が横たわる
誰かの足首に似た艶やかさ
生物の定義を変えざるを得ない

既に無意味となった短編小説
濁った雑音が言語となっている
それを装飾する干からびた死骸

何かが存在しないのではなく
全てがありふれて存在していること
その明白さと鬱陶しさ

充満する「ねばならぬ」
産卵する「べき」
昇華されること無く積み上がるもの

ドラマチックな惨劇や事件
ゲーム化される政治・経済的戦略
物理的装飾音として形骸化された詩情

不安を先取りしてしまった者達―――
その、死、または地下生活
次々と骨壷が増産されてゆく

単なるビッグデータとしての事実の山が
たなびく薄雲のように浮かんでいる
抜け殻のような軽さに透き通って

横たわる青い円柱はコピーする

数々の螺旋紐を吸い寄せながら
際限なく長く伸びてゆく

まだ消滅するには十分でない
この牢獄の中にはまだ「続き」がある

(2014.3.23)